

目 次

はしがき

凡 例

イントロダクション**0 章 取扱説明書** ————— 3

- 1 節 まずは通読 3
- 2 節 ステップアップシステム 4
- 3 節 網掛けテーゼによる復習、記憶の喚起 5
- 4 節 囲み事例による具体的イメージの喚起 6
- 5 節 サイドステップ 6

1 章 刑法の学習 ————— 7

- 1 節 何ができるようになればよいのか 7
- 2 節 事例、設例と学ぶべきルール 8
- 3 節 ルールと解釈と判例 10

2 章 刑法総論では何を学ぶか ————— 13

- 1 節 いろいろな次元のルール：犯罪論と刑罰論と罪数論・基本原理・総論と各論 13
- 2 節 犯罪が成立するためにはどのような事情が必要か：犯罪論の諸ルール 1 15
- 3 節 どのような事情があるときに犯罪だとしてはならないか：犯罪論の諸ルール 2 17
- 4 節 「犯罪論の体系」の学び方 20

3章 罪刑法定主義と刑法の解釈 ————— 23

- 1節 解釈のガイドラインと制限 23
- 2節 罪刑法定主義 24
 具体的ルール／なぜこのような原則があるのか／類推解釈の禁止

サイドステップ

「判例」と「裁判例」 12／刑罰にはどのようなものがあるか 14／法定刑と処断刑と宣告刑 21

ファーストステップ：犯罪が成り立つには

4章 犯罪を成立させる事情 ————— 31

- 1節 行為、結果、因果関係、未遂 31
 違法性の源泉としての結果／因果関係
- 2節 犯罪の主体 41
 身分犯／法人の犯罪
- 3節 故意 46
 故意に必要な認識／故意の存在時期／故意の種類
- 4節 結果的加重犯 51
- 5節 違法性の意識の可能性 53
 違法性の意識の可能性の意義／違法性の錯誤と違法性の意識の可能性
- 6節 過失 57
 注意義務違反／過失の種類

5章 犯罪の成立を妨げる事情 ————— 67

- 1節 犯罪成立阻却事由 67
- 2節 正当防衛 68
 正当化根拠／正当防衛の成立要件／過剰防衛／誤想防衛／誤想過剰防衛

3 節	緊急避難	77
	不処罰の根拠／緊急避難の成立要件／過剰避難／誤想避難・誤想過剰避難	
4 節	正当防衛・緊急避難以外の違法性阻却事由	82
	正当行為／被害者の同意	
5 節	責任無能力	87
	責任能力の意義／責任無能力・限定責任能力／法律効果／心神喪失・心神耗弱／刑事未成年／原因において自由な行為	
6 節	違法性の意識の可能性	95
	違法性の錯誤／「違法性」の意識の不存在／違法性の錯誤の効果／違法性の意識の可能性の不存在	
7 節	期待可能性	100
	意義／体系的地位／期待可能性の不存在による責任阻却・減輕事由／期待可能性の判断基準／期待可能性の錯誤	
8 節	錯誤	103
	故意の否定／事実の錯誤と違法性の錯誤	

サイドステップ

既遂犯、未遂犯、そして予備罪 40／管理・監督過失 65／犯罪成立阻却事由の種類 67／カルネアダスの板 78／行為能力・犯罪能力・受刑能力・訴訟能力 87／「たぬき・むじな」事件と「むささび・もま」事件 105／一故意犯説 110／人違いと犬違い 112

セカンドステップ：犯罪の様々なかたち

6 章	何かを「しない」犯罪 = 不作為犯	119
1 節	真正不作為犯と不真正不作為犯	119
2 節	不真正不作為犯の成立要件	119
	作為義務違反／因果関係／作為犯との同価値性	
7 章	既遂結果が発生しない場合 = 未遂	126
1 節	未遂犯とは	126

- 2 節 実行の着手 127
 実行の着手時期とは／実行の着手時期の特定方法
- 3 節 不能犯 129
 不能犯とは／不能犯における既遂結果に至る現実的な危険性の判断方法
- 4 節 中止犯 132
 中止犯の減免根拠／中止犯の成立要件

8 章 犯罪に複数人が関与する場合：「共犯」現象 ————— 136

- 1 節 「共犯」とは？ 136
- 2 節 共犯の種類と成立要件 136
 間接正犯／共同正犯／教唆犯／幫助犯
- 3 節 共犯の諸問題 151
 共犯と身分／共犯の錯誤

9 章 罪 数 ————— 159

サイドステップ

ひき逃げ 125／どのように既遂結果に至る現実的な危険性の有無が判断されるか？ 130／意思連絡と「共謀」 144／中立的行為による幫助 150／相互共犯の理論——共同正犯の正犯性と共犯の従属性 154／客体の錯誤？ 156

サードステップ：基礎理論と論争問題

10 章 刑罰理論と責任主義 ————— 165

- 1 節 応報刑と目的刑 165
 刑罰の正当化根拠——応報刑と目的刑／応報刑論／特別予防論／一般予防論
- 2 節 犯罪論と刑罰理論の関係 168
 客観主義と主観主義／法益保護と刑法の任務／総合説における個々の観点の適用場面

3節	責任主義	172	
	「責任なければ刑罰なし」／規範的責任論の責任モデル／意思の自由と責任／客観的処罰条件		
4節	刑法の適用範囲	176	
	国内犯／国外犯／時間的適用範囲		
11章	犯罪論の体系		179
1節	違法と責任の区別	179	
2節	構成要件概念と体系構想の争い	181	
3節	正当化事情の錯誤	183	
12章	結果無価値論と行為無価値論		186
1節	故意の体系的地位	186	
	結果無価値論と行為無価値論／主観的違法要素／未遂犯の判定基準		
2節	新旧過失論争	190	
	過失の実行行為／注意義務の内容と標準／許された危険／信賴の原則		
13章	共犯の処罰根拠と従属性		201
1節	因果的共犯論と犯罪共同説・行為共同説	201	
	因果的共犯論／犯罪共同説と行為共同説		
2節	罪名従属性	209	
	共犯の過剰／承継的共同正犯／共犯関係の解消		

サイドステップ

法格言と標語的表現 171／ラテン語 175／故意の体系的地位と犯罪論体系の関係 189／アジャン・プロヴォカトゥールと刑事手続上の問題 206／必要的共犯と共犯の処罰根拠論 208／共犯論——絶望の章か、体系論の試金石か 215

判例索引／事項索引